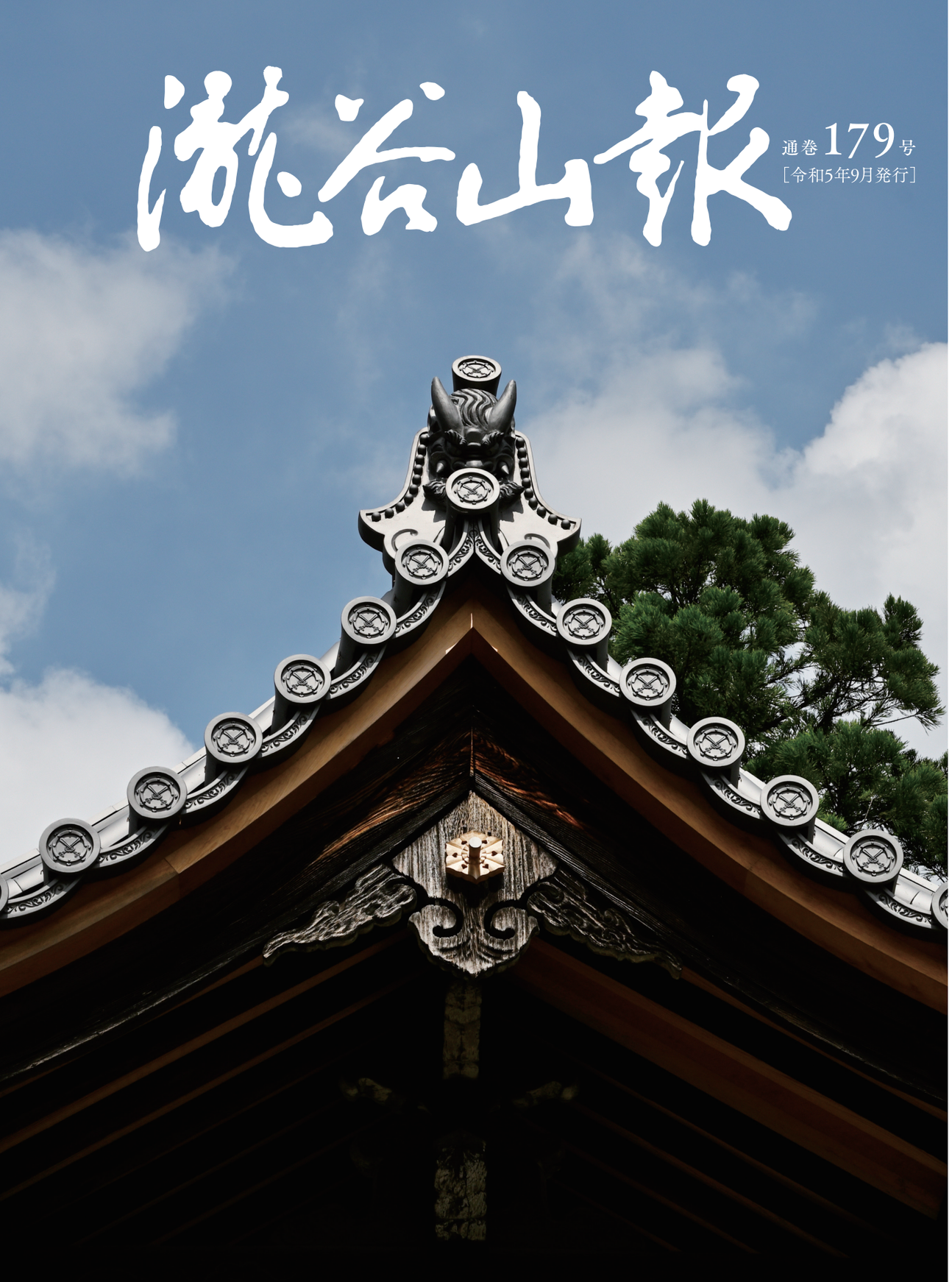
瀧谷山報

通巻179号
［令和5年9月発行］



【今後の当山行事予定】

秋季大祭　9月28日

●御本尊御開扉大護摩供【本堂】
〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時

●大般若経転読付大護摩供【本堂】
午前11時30分

●柴燈大護摩供【境内】
午後1時 開始

七五三詣り　10月1日～11月末

●七五三祈祷会【本堂】
●平　日〈午前〉10時・11時30分
●土・日・祝〈午前〉10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時
※通常の本堂でのお護摩と同様、寺務所にてお申し込みください。

納め不動　12月28日

●御本尊御開扉大護摩供【本堂】
〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時

日々のお護摩祈祷

●平　日…〈午前〉7時・10時・11時30分
●土・日・祝…〈午前〉7時・10時・11時30分　〈午後〉1時30分・3時
（ご祈祷のお申し込みは少し早めに寺務所にてお願いいたします）
●仏具磨きの日… 9月25日・10月25日・11月25日・12月25日は
午前7時の朝護摩のみとなります。

交通安全祈願（車のご祈祷）

午前9時より午後4時（毎時0分・30分よりご祈祷いたします。少し早めに寺務所にてお申し込みください）
※毎月28日は交通安全のご祈祷はありません。

毎月28日

●御本尊御開扉大護摩供…〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時
●滝不動堂護摩供・宝剣加持…午前9時頃～午後2時頃
（滝不動堂にて山伏にお尋ねください）

【大掃除のお知らせ】
令和5年10月13日に本堂諸堂の大掃除を行います。この日は、本堂のお護摩祈祷は午前7時の朝護摩のみ、交通安全のご祈祷はありません。ご注意ください。

行事の予定は変更になる場合がございます。
詳しくは瀧谷山公式ホームページにて随時
ご案内いたしますので、来山前に今一度
ご確認ください。

瀧谷山公式ホームページ　インスタグラム

令和5年9月発行
通巻179号
●発行所：瀧谷不動明王寺　〒584-0058　富田林市彼方（オナカ）1762　電話 0721-34-0028　振替 00930-5-17704
●発行人：荒谷純光　●編集人：津田貴司

いま、三世を生きる

歴史に関心を寄せるという行為は、人間が具える特徴の中でも殊更強調していい感性ではなかろうか。過去・現在・未来の三世と時間を区分けする概念は、ほかの生き物を観察していても感じにくい。

過去という面に目を向ければ、どこの国にも誇るべき歴史とそれを表わす文化的遺産が存在する。時にはそうした歴史そのものが何度も塗り直される、厳しい行為が下されることすらある。塗り替えねばならぬほどに、歴史というものには人間の知力や体力のすべてを凌駕する絶大な引力があるのかもしれない。

ここ半世紀の間にユネスコは世界遺産の仕組みを整え、わが国にも認定された場所は複数を数えるようになった。近畿圏のひとつ、遺産名称「古都奈良の文化財」には東大寺、興福寺、春日大社などの名だたる寺社が含まれて国内外から訪れる人が絶えない。

これらの寺社が奈良そのものの形成発展に深く関与すると共に、広く知られている事実と、逆に忘れ去られんとする事実の双方が内在している。例えば名物の鹿が泰然と暮らす奈良公園周辺、その広大な地域には博物館や各種の公的機関、名勝庭園を有するホテルなどが建ち並ぶ。一見して奈良らしい風景であるが、明治時代の初めまでその一帯すべては、興福寺の境内域にほかならず、格別に値する門跡寺たる一乗院や大乗院の威容もそこにあった。

この変容ぶりは、明治初頭に吹き荒れた廃仏毀釈政策の禍根ともいえるが、このテーマは他の機会に論ずべき題材のため、これ以上は触れない。

このように歴史もひと皮めくれば、幾重にも重なる地層のような歴史の断面が見えてくる。その悠久の時を刻む奈良において、めくりめくれども、常に同じ断面が出てくる稀有なできごとがある。東大寺・二月堂の「お水取り」がそれである。

正式には「修二会」と呼ばれる法要は、奈良に春を告げる三月上旬の風物詩。はるか遠く奈良時代（天平勝宝四年・西暦七五二）に始まった。わが国には伝統の名にふさわしい行事が各地にたくさん伝わるが、この「お水取り・修二会」は、特筆される点が幾つかある。

第一に、千三百年もの間、毎年行われていること。戦禍や災禍に遭えども決して絶やさなかった継続性。因みに弘法大師が勅願で始められた「後七日御修法」という大法要でさえ、数度の断絶を余儀なくされている。

第二に、千三百年前の暮らし方を守っていること。前行本行の一か月間、関係者は一所に参篭し精進潔斎の身となる。その徹底ぶりは修行僧が着する衣は自ら和紙を用いて製作する一点をみても判る。利便性を極めつつある現代社会の利点を一切省みず、奈良時代の様式を可能な限り変えようとしない、そこには逞しいほどの生命力があふれている。

第三に、時を超越していること。お水取りの法要は兜率天で営まれていた法要をこの下界にて行じようと試みる。堂内を駆け足で回る所作なども兜率天上とこの娑婆の時間差を無くす意図がある。三世という時間軸を、この今という瞬間に凝縮して祈る場面がお水取りの随所にみられる。今を見つめることで過去を知り、今を極めることが未来をも定める、すなわち今こそが、三世そのものを生きていることなのだと。その清冽な実感を練行衆という修行者は追体験を繰り返し、累代に継承してゆく。

およそ三十年ほど前である。墨染の衣と錫杖を執ってあちこちを旅していた。凍てついた葛城山系ではいささか危険な体験をし、緊張から解放されると奈良の町にたどり着いた。東大寺の大仏様に額ずいて二月堂方面に歩を進めると、そこかしこからただならぬ気配がする。大きな松明のかたまりを見て、お水取りだと初めてわかる。夕方が近づくにつれて人々が二月堂の舞台下に続々と押し寄せ、立錐の余地はない。練行衆の上堂を導く大松明が何本も登場、その火の粉が舞台から雨の如く降り注がれるたびに歓声が上がる。松明の演出が済むと、群衆は波が引くように帰路につく。

これからが法要の本番だろうと、私は二月堂の舞台に近づいた。すると出入り口に立つ東大寺の僧が「真言宗の方ですか」と尋ねる。身分を明かすと、「どうぞこちらに」と言って堂内に招き入れてくれる。指示されるままに案内された場所は、堂内の一等席であった。

松明のあかりのみで作り出される幽玄な空間で、韃靼という五体投地、走りの行法、数々の所作や声明が眼前で繰り広げられる。圧巻という表現はこういう時のためにある。期間中は二度だけ行われる有名な「過去帳奉読」にも巡り合うことができた。

時を忘れて長時間が経過し、ようやくお堂の外に出た。顔も鼻の中まで松明の煤で真っ黒になっていた。身は煤でよごれていたが、心中は清々しさで満ちていた。天空に輝く星々のきらめきは増し、闇に光る鹿たちの目が私を取り囲み惑星のようになっていた。

歴史ということを思案するたびに、この時の稀有な経験がよみがえる。今を生きることは、三世を生きること。日頃の伝統や習わしをいかに大事にするか、その心がけひとつで生き方も暮らし方もぐっと違ってくる。そうした思いでこの秋を迎えたいものである。

秋季大祭

九月二十八日（木）

大般若経転読付大護摩供
柴燈大護摩供 厳修

令和五年九月二十八日（木）、瀧谷不動尊では秋季大祭をお勤めいたします。

本堂にて午前十一時半より大般若経転読付大護摩供が勤められます。大般若経転読法要では『大般若経』六百巻を作法に則って転読し、世界和平・万民豊楽を祈願し、あわせてご参詣の皆様のお願い事を祈念いたします。

その後、境内にて午後一時より瀧峰大護摩講の修験者による柴燈大護摩供が盛大に勤められます。柴燈大護摩供では、五穀豊穣・各願成就を祈願し、添え護摩木を火中に投じ御信徒皆様の所願成就を祈念いたします。

当日は本堂での大般若経転読付護摩供にお申込みいただき、柴燈大護摩供にもお詣りされますよう、ご案内申し上げます。

●御本尊御開扉大護摩供
【本堂】…午前六時

●大般若経転読付大護摩供
【本堂】…午前十一時三十分

●柴燈大護摩供
【境内】…午後一時開始
午後二時点火

◎護摩木…一本 三〇〇円

（護摩木は当日朝から受付しておりますので、お願い事とお名前をお書きいただき、お申し込みください。）

柴燈大護摩供とは…

山中で採った柴に火を灯し、その火中に不動明王を招いて人々の平安を祈る、修験道の儀礼です。宇多天皇の寛平二年（890年、平安時代前期）日吉大社においてはじめて勤められたものが起源といわれます。修験道は世俗から切り離された清浄な山中を仏そのものと考え修行に勤しみます。柴燈大護摩供では、山伏問答、宝斧・宝弓・宝剣の儀など古式ゆかしい作法が勤められたのち、ヒバで覆われた護摩壇に火を放ち、天をも焦がすほどの炎の中に数万本にも及ぶ護摩木を投じて、祈りを込めてお焚きいたします。

大般若転読とは…

六百巻に及ぶ『大般若経』を大勢の僧侶が読誦します。その際、蛇腹折りになった経本を大きく宙に広げ、高い位置から頁を一気に繰り落とすようにする所作が目を引き、このとき生じる風を受けると長寿になる、厄除けになるともいわれています。また読み終えた経本を机に叩きつけるようにする大きな音も特徴的で、非常に勇壮な読経であり、普段にもましてダイナミックで荘厳な護摩供であると言えましょう。

七五三詣り ご案内

十月一日～十一月末

瀧谷山では、毎年十月一日より十一月末まで、七五三のご祈祷をお勤めしております。

七五三のご祈祷をお申込みいただきますと、本堂でのご祈祷のあと、お子様ご自身に絵馬にお願い事を書いていただき、お札・身代守のほか、千歳飴などの縁起物をお渡しいたします。

ぜひご家族皆様でご参詣いただき、お子様・お孫様の健やかな成長と幸せをお祈りください。

●ご祈祷時刻
平日…午前十時、十一時半
土日祝…午前十時、十一時半、午後一時半、三時

●ご祈祷料…当座五千円より
（当座＝当日お詣りされる一回のご祈祷）

●授与品…お札・身代守・絵馬・千歳飴・おもちゃ

◎通常のご祈祷と同様、寺務所にて「七五三のご祈祷」とお申し込みください。

◎仏具磨きの日（毎月二十五日）、大掃除の日（十月十三日）はお勤めがありませんので、ご注意願います。

七五三のご祈祷は、数え年・満年齢に関わらず受けていただくことができます。また十一月十五日に限らず、秋の気候の良い時期にお詣りをお勧めしております。縁起やしきたりにとらわれず、どうぞご都合に合わせてご参詣ください。

また、ご自由にお使いいただける撮影所を設けておりますので、参拝の記念撮影にどうぞご利用ください。

◆交通安全祈願 御祈祷料改定

令和五年十月一日より、交通安全祈願 御祈祷料を、左記のように改定させていただきます。

●交通安全祈願
御祈祷料……一台　五千円

平成初期以来、約三十年ぶりの改定となります。物価の変動等の情勢を考慮の上、やむなき判断をいたしました。何卒、ご理解ご了承いただけますよう、お願い申し上げます。

滝不動堂護摩供のご案内

毎月二十八日、滝不動堂では瀧峰大護摩講の修験者により護摩供が勤められます。ながらく休止しておりました宝剣加持も再開しております。参詣の際には、滝不動堂にもお詣りいただき、宝剣加持を受けられるとともに、どじょう流しされることをお勧めします。

滝不動堂で焚かれる添え護摩木は滝不動堂の受付でお申し込みください。添え護摩木一本につき黄色い護摩札を二枚お渡しします。黄色い護摩札を三十六枚集めると御幣一体と引き換えしております。御幣の引き換えは一願不動堂の受付までお申し出ください。

滝不動堂護摩供・宝剣加持
●毎月二十八日
午前九時頃～午後二時頃
●護摩木…一本 三百円

「貪りの心②」

前号から少し日が開きました。「貪り」についてのお話、今回はその第二話です。

前回紹介しましたように、「泥に生じた蓮華が、咲き誇っている間は見る人の心を喜ばせるのに対し、枯れて、腐りはじめてからは喜びも無く、心地悪しきものとなる。貪りによって得られる喜びも、それと同じ様である」(『宝性論』)とあります。

これは一体どういうことでしょうか。

貪りとは何か、まさに「よくばって無駄にたくさんのものを得ようとする心、行動」のことです。

身近な話でたとえますと、先日、とてもおいしいコロッケを食べました。一くち二くちで食べられる、小さな俵型のコロッケです。

「あら、なんておいしい」

一つ、また一つと食べてしまいます。食べている間は、いくつでも美味しくて、もう一つ、もう一つだけ、と食べたが最後、後に待ち受けているのは胸やけです。

このたとえは、少々、間の抜けた感じがいたしますが、貪りの構図とはまさにこのようであると思います。貪り、よくばって得られた快楽は、それを享受している間は心地よくても、終わってみれば「やめておけばよかったなあ」なんてこともあります。気分が高じて、もう一杯だけ、と飲んだお酒でひどい二日酔いになる人もあるでしょう。

それに、あなたや私がよくばって無駄に得た「それ」は、もしかすると、他の誰かが欲しかったのに得られなかった分だったかもしれません。

このような「あともう少しだけ」は、控えめな、ごく当たり前の欲求のようでいて、自分にとっての「足りる分」以上を求め、多く得ようとする制御のむずかしい心なのです。

そして、余分に得ている最中はどうしてか、とても気分が良いもので、それも私たちがこの貪りの心を離れることができずにいる原因と思われます。しかし、その時の良い気分・状態がずっと持続するのではありません。美しく咲いた花が枯れるように、おなかは一杯になり、お酒による酔いは回ります。そのように状態は変化しますから、ずっと心地よいままでいられるわけではないのです。

どうかこのこれらのことを心に留めて「今日はここまでにしょう」とすっぱり止められる自分でありたいですね。このような気づき・心がけで、仏さまのように、そして蓮のように清らかな心を磨いてまいりましょう。

瀧谷山の四季⑤

瀧谷山にはたくさんの野鳥が暮らしています。ちょうど春季大祭のころが夏鳥のピークで、早朝にはお滝へ向かう参道でオオルリのさえずりが聴こえます。ほかにもキビタキやイカルなどの美しい声の野鳥がたくさんやってきます。夜になるとホトトギスが鳴きながら飛びまわり、アオバズクの声も森の向こうから聴こえてきます。

オオタカは瀧谷山の境内周辺に年中暮らしています。武士が好んだという精悍なその姿は確かに格好の良いものです。本堂裏山の上空を舞うこともありますし、向山の木の梢にひっそりと隠れるようにとまって、あたりを見回していることもあります。先日、空高くからオオタカの鳴き声が聴こえたと思うと、そこに巣立ったばかりの若鳥が飛んできました。すると親鳥らしきオオタカが、掴んでいたウサギのような小動物を落としました。若鳥がそれを空中で掴んで飛び去り、親鳥はまた別の方向に滑空していきました。狩りの訓練でしょうか。

参拝の折には山の上や空を眺めてみてはいかがでしょうか。オオタカの姿が見られるかもしれません。

瀧谷山温故知新②

開創当初の伽藍地は？

實善老僧の著作『瀧谷山史考』を紐解くと、老僧は境内のみならず、その周辺を隈なく歩き回って瀧谷山の歴史をつぶさに検証していたことが窺えます。老僧は、嵯峨天皇の弘仁十二年弘法大師によって滝谷山が開創されて以来、どのような地勢と歴史のなかで存続してきたのかを考察しておられたのです。

あるとき山主と共に、「奥の谷」から嶽山の北麓のほうへ、境内飛び地の検分に行ったことがありました。『瀧谷山史考』によると、奥の谷を三百メートルほど入ったところに「古滝」とよばれるところがあり、正平十五年（一三六一年）足利義詮の嶽山攻めの兵火を逃れて不動明王・両童子が隠され祀られていた場所であるということです。現在ではお堂があった形跡はありませんが、かつては高さ四～五メートルもある大きな滝があり、大正の頃まではここで滝行が行われていたとのことです。谷川に削られてできた荒々しい崖の様子は、神仏を祀ったり大切な寺宝を隠したりするのにふさわしい場所のようにも思えます。「奥の谷」をさらに進んでゆくと、谷の突き当りから嶽山城址へと続く舗装道が右手に続き、左手の農道を進むとやがて獣道になり、深い山林に入ります。嶽山本体の北斜面に分け入って進むと、小さな沢が滲みだしてくるちょうどそのあたりに、宝篋印塔が二基、その真ん中に石碑が立っていました。

千畳敷より嶽山を望む

『瀧谷山史考』には、次のような記述が見られます。

―現在嶽山の北麓には、明王寺所有の土地がある。そこには石の供養塔二基が建っており、その下手には、以前、用水池として使っていた池も遺っている。この池は「みなみばら」の谷の、一番奥の突き当たり、嶽山北麓にあるが、この池の下流に、明王寺所有の田地も十数枚ある。そしてこの石の供養塔の建っているあたりが、元の明王寺のあった場所であろうと言われている―

ここに書かれている石の供養塔というのが、先ほどの宝篋印塔二基のことでしょう。つまりこの辺りは、嶽山の北斜面から「奥の谷」と「みなみばら」という二つの谷が分かれていく、谷の最も深奥に位置する部分です。ふつうであれば宝篋印塔や石碑のあるこの一帯が滝谷不動明王寺の当初の伽藍のあった場所だろうと考えるところですが、實善老僧は慎重な姿勢を示しておられます。

―当初、弘法大師が不動明王を祀られたのは嶽山北麓であったに違いないと思うが、さてその場所が正確に何処とは、今すぐ確定は難しい―

たしかに老僧が考察している通り、この辺りは伽藍地とするには見晴らしもなく広さも十分ではなく、いかにも谷の一番奥という感じの入り組んだところで、少なくとも本堂があったような場所ではないように思えます。そこで老僧は「伽藍ではない何等かの建物があった場所」であるかもしれないと述べています。

『河内名所図絵』によると、宝篋印塔のある谷の奥のやや西側に「千畳敷」とよばれる開けた一帯があります。「千畳敷」は、正平十五年の兵火の後、畠山勢の練兵場として使われていたところであると言われ、康応元年（一三八九年）この地に逗留した畠山国政が日野村観音寺に納めた大般若経の写経には「於嶽山西陣不動堂書之」という奥書が見られます。この不動堂とは、伽藍が焼かれた後に不動明王をお祀りしていた仮のお堂でしょう。付近には「大門田」といった古い地名も残っており、「千畳敷」の中央に「堂ノ壇」という地名が位置しています。「堂壇」とはお堂の基壇という意味であることから、この「千畳敷」あたりが、弘法大師開創当時の瀧谷不動明王寺の伽藍地であったのではないか、というのが實善老僧の推測です。

検分の帰り道、もと来た奥の谷のほうにすこし戻り嶽山の緩やかな山麓を眺めながら、いまや笹竹の生い茂る荒れ野となっている「千畳敷」に兵どもの夢の跡を幻視し、さらにその焼き討ちに合う以前、開創当初の明王寺の大伽藍があったことを想像すると、非常に感慨深いものがありました。

お寺のごはん

13 人参と蓮根の煮和え

お寺ではお供えに上がったお野菜のお下がりをいただきます。春は筍ご飯、六月ごろにはじゃがいもとささげの炊き合わせなど、その季節の旬のものを料理します。蓮根の旬は冬ですが、夏蓮根は夏から秋までシャキシャキした食感が美味しく、人参ともとても相性の良いものです。きんぴらほど濃くなく、あっさりやさしい味付けのお精進です。

材　料	●人参　●蓮根　（●油あげ）　●昆布出汁　●砂糖　●薄口醤油
作り方	●人参は薄いいちょう切り、蓮根も同じように薄くいちょう切りにいたします。 油あげは、入れても入れなくてもお好みです。入れる場合は、ごく薄い短冊切りにいたします。 ●昆布のお出汁に砂糖と薄口醤油でごく薄く味をつけておいてから、人参と蓮根を入れてお箸で和えるように混ぜながら煮ます。油あげを入れる場合は先にお出汁に入れて一煮立ちさせてから人参と蓮根を入れるようにします。材料すべてが薄切りなので、比較的短時間でさっと煮ます。

色も食感もよく、お野菜をいただいたという感覚が食後も残ってさわやかなご馳走です。

お初穂米お供えのご案内

今年もお初穂米のお供えをお願いする時候となりました。

初穂とは、今年の実りに感謝し来年の豊穣を祈念して神仏に捧げるお供えのことで、瀧谷山でも農家の皆様よりその年の新米をご奉納いただいてまいりました。現在ではより広く、お初穂米もしくはお初穂料としてお供えいただいております。

奉納いただいたお初穂米は、節分過ぎまでお不動様ご宝前にお供えして来年の豊作を祈念いたします。

お初穂米もしくはお初穂料は、この山報と同封のビニール袋に入れ、封をして寺務所までお持ちください。

●受付　寺務所